「葉桜とセレナーデ」２０２４年版

作　ごまのはえ

登場人物
男①……港町で居酒屋を営む
男②……港町に来た男
看護師

場所　産婦人科の駐車場
時間　感染症の流行が続くある年の５月

シーン①　大石はどこに？

北国の港町。
心地よい風に葉桜が揺れている。
陽射しがまぶしい午後。
舞台は港町にある産婦人科の駐車場。
そこにパイプ椅子が四つと小さな机だけがある。
椅子は間隔をあけておかれている。
机には消毒液と、呼び出しのための小型のインターホンが乗っている。
まだまだ続く感染症の対策のため、院内へは妊婦本人以外は入れない。
そのため駐車場の一部が簡易の待合室になっているのだ。

上手袖は病院の玄関に続く。
下手袖は駐車場が続いており、劇中に車を使用する時は下手袖に去る。
真正面（客席側）は片側二車線の道があり、道を挟んでグランドがある。
そこでは現在少年野球の試合が行われている。
舞台奥は病院で、病室の窓が並んでいる。

開演すると、臨時待合場にはマスク姿の男（男②）が落ち着きのない様子で座っている。カジュアルながら高価そうなジャケット姿。でも今日の陽射しでは少し暑そう。
下手から車のエンジン音。
やがて停止すると、男①が登場する。
こちらもマスク姿。Ｔシャツにジーンズ。肩からポシェット。バイト先に向かうフリーターのような格好だ。手には赤ちゃん用品の専門店で買って来たらしい買い物袋を持っている。

来るなり机の上のインターホンを押す。
しばらく間があって、インターホン越しに看護師の声。

看護師の声　はい。
男①　あ、３０２号室の大石の、夫です。あの、買って来ました。
看護師の声　はい。受付で受け取りいたします。
男①　はーい。

インターホンは切れる。
男①は買い物袋のなかを確認し、消毒液を使う。
男②は「大石」という言葉を聞いた瞬間から、男①から目が離せない。
男①は上手に去る。

男②　…３０２号室。

男②は病院を見上げる。三階のそれらしき部屋を探す。
しばらくして男①が手ぶらで戻ってくる。
男①はパイプ椅子に座る。
男②もその顔が見たくて、恐る恐る横に座る。

男①　（男②の視線に気がついて、会釈）
男②　（会釈を返す）
男①　いや、はじめてなもんで。
男②　……。
男①　急だったんですよ。あ、でも、いつ来てもおかしくない感じではあったんですけど、今朝急に。

男①は上機嫌にしゃべり続けるが、男②は男①をじっくり観察している。

男①　で、慌てて車に乗せたんですけど、看護師さんに「準備できてます？」って聞かれて。「え？」ってなっちゃって。パジャマとかスマホの充電器とかそういうもんは、一応持ってきてたんですけど。「生まれた後の準備もお願いします」って。で、いま慌てて。なんか慌ててばっかりで、今日は。そろえました？
男②　え？
男①　あ、じゃ奥さんがいつの間にか準備してたパターンですね。いや、ウチもそうかと思ってたんですけど。フタ開けてみると全然。

男②　……。
男①　えっと、（ポシェットからレシートを出す）授乳用のブラジャー二枚。お産用パット。母乳パット。精浄綿。産じょくショーツ二枚。リフォーム用サポーター。退院時のママの洋服。そしてストロー。
男②　ストロー？
男①　ペットボトル用のストローです。寝ながら飲める。
男②　なるほど。

男①は病室を見上げる。
そして興奮した様子で駐車場内を歩く。
止まって、スクワットをする。
太陽を拝む。
そしてパイプ椅子のパイプの部分をつかみ、指だけの力で潰そうとする。

男①　（力をこめ）ハングウウウウウウ！
男②　どうしました？
男①　（顔がみるみる赤くなる）ハング！ハングウウウウウ！
男②　ちょっと、大丈夫ですか？
男①　（指を離す。顔色も戻る）ふー。
男②　……。
男①　色々、手伝った方がいいですよ。いや、正直僕も産じょくショーツとか、ひるみました。産チョクショーツって聞こえて、産地直産のショーツかと思いました。でも、お店行くと全部教えてくれましたよ。ストローも。ほっとくとドンドンあっち任せになっちゃいますからね。やって良かったと思ってます。……二人の子供ですからね。
男②　……。
男①　あ、ごめんなさい。なんか偉そうなこと言って。
男②　いえ。
男①　はじめてですか？

インターホンから看護士の「大石さーん」の声。

男①　（少し間があいて）あ、そうか。（インターホンに向かって）はい。
看護師の声　奥さまからの伝言です。「車のなかに荷物忘れたそうなので、持ってきてください」とのことです。
男①　荷物？
看護師の声　はい。朝の荷物と言えばわかると仰ってました。

男①　……あぁ、はいはい。
看護師の声　「あと温かいほうじ茶を買ってきてください」以上です。
男①　はーい。

男①は下手に去る。
一人になった男②。

男②　（小さな声で）…アレが、俺の…。

そこに男①が戻ってくる。
手には大きめのカバンと、車に置いていた自分用のペットボトルを持っている。
インターホンを押す。
しばらく間があって、

看護師の声　はい受付です。
男①　あ、３０２号室の大石の、夫です。荷物。たぶんこれだと思うんだけど。
看護師の声　はーい。受付にお越し下さい。
男①　はい。

男①はカバンを持って、消毒を済ませた後、上手に去る。

男②　……アレが、俺の、義理の息子！

男①が戻ってくる。
再び二人は並んで座る。

男①　いやーはじめてなもんで。

男①はポーチからサプリのようなモノ（錠剤）を取り出し、ペットボトルで飲む。

男①　（飲み下し）よし！
男②　（前のセリフをやや喰い気味に）どうですか？
男①　は？
男②　奥さん。
男①　午前中に入院したんですけどね。どうなんでしょ。ここにいちゃ様子もわかりませんしね。

男②　もう部屋は移ったんですか？
男①　え？
男②　だからあるでしょ、分娩室とか、
男①　いや、どうだろ。まだ病室じゃないかな。
男②　（病院を見上げ）どこ？
男①　え、
男②　３０２、どこ？
男①　えっと、
男②　（指をさし）あそこですか？（別を指さし）そこ？
男①　落ちついて下さい。なんか、え？混乱されてます？
男②　……。すみません。
男①　いえ、大丈夫です。あ、（と、下手に向かいかける）
男②　どこに行くんですか？
男①　いや、向こうにコンビニあるんで。
男②　は？
男①　いや、ウチのが温かいほうじ茶ほしがってるみたいで、
男②　私が行ってきます。
男①　は？
男②　君はここにいてあげなさい。
男①　なんでそうなるんですか？
男②　いつ、何があるかわからないでしょ！
男①　でも、だって、変でしょ。飲みたがってるの、ウチのですから。
男②　ウチの、
男①　はい。
男②　少なくとも私はそんな言い方しないな。
男①　は？
男②　私ならウチの妻って言う。妻は省略しない。「ウチの」ってそれだけじゃ、君の所有物みたいじゃないか。
男①　……。
男②　「もしかしてやべー奴？」と思ったなら、それでもいい。
男①　……。
男②　「やべー、やべー奴確定じゃん」と思ったら、それもいい。
男①　……。
男②　何故なら、私の「ヤバさ」にはちゃんと理由があるからだ。理由もなくヤバいわけではない。わかるね。
男①　（脅えて）わかりません。

男②　言っとくけど私は冷静だよ。あり、おり、はべり、いまそかり。どう？冷静じゃない人間がこんなこと言える？わかるね？
男①　（さらに脅えて）わかります。
男②　東野英二郎、西村晃、佐野浅夫、石坂浩二、里見浩太朗、武田鉄矢。どう？これ以上ないほど冷静だろ？もちろん鉄矢だけＢＳだよ、それもわかってる。

男②は男①に鼻先がぶつかるほどの距離まで近づく。

男①　怖いんですけど、
男②　私だって怖い。自分が怖い。自分の身勝手さにウンザリしてる。今さら（と言いかけて、男①の目尻のシワから彼の年齢が気になる）

男②は男①のマスクをはずそうとする。
男①は逃げる。

男②　いくつだ？顔を見せろ！

男①は、男②に向かって頭を下げる。

男①　すみませんでした！
男②　……。
男①　身内しか付き添えないって言うのはわかってたんですけど……、

奇妙な間。

男①　あれ？
男②　え？
男①　バレてなかった？
男②　……何が？
男①　あ、何でもないです。
男②　バレてる！全部バレてるぞ！
男①　じゃ、何がバレてるか言ってくださいよ。
男②　え、
男①　もー、損した！やっぱりバレて、
男②　バレてる。バレバレだよ。
男①　……

男②　ごまかせると思うなよ。
男①　何を？
男②　君、身内じゃないんだろ？
男①　見せてください。
男②　……ん？
男①　手帳。あれってドラマとかだけなんですか？
男②　……。
男①　（警察手帳を出す仕草）「警察だ！」って、
男②　（わざと激高して）警察をバカにしてるのか！
男①　すみません。
男②　まったく。
男①　まだ、疑ってるんですか？
男②　……。まぁな。
男①　他にすることあるでしょ？
男②　……。例えば？
男①　そんなの自分らで考えてくださいよ。そりゃ、大石はウチの常連でしたよ。でもウチは仕入れてませんから。だいたいウチはそういう店じゃないですから、アワビとかウニとか、そんなの並べる店じゃないんです。グラタンにうどん入れてハイボールチビチビ飲むような店なんです。警察だって調べに来たでしょ？
男②　まぁな。
男①　……これ以上はマジ勘弁してください。カコちゃん、って言うのは大石の奥さんですけど。いまそれどころじゃないんで。
男②　……。ごめん。何の話？
男①　バレてなかったんですか？？？
男②　ほとんどバラしてくれたんだけど、予想以上に話が絡んでて。確認させてくれる？
男①　……。

インターホンから「大石さーん」と呼び出し。

男①　（少し間をおいて）あ、そうか。（インターホンに向かって）あ、今行きます。あ、今からコンビニに行きます。すみません。

男①は男②を警戒しつつ、下手に去る。
下手から男①の車のエンジン音。
やがて車は出て行く。
男②は情報過多で少し焦っている。

一つ一つ確認するように喋る。

男②　あれは、俺の義理の息子じゃない、…警察？……何した？

しばらくの間、男②はうなだれたまま。

男②　（急に顔を上げて）だよな、どこまで身勝手なんだよ。今さら父親ヅラなんか……。

男②はポケットから写真を取り出す。
しばらくその写真を見た後、病院を見上げる。

男②　ごめん。

男②は手にした写真を破こうとする。
けれど破けずに、ポケットにしまう。
そして下手に去る。（車に乗ったのではなく、徒歩で病院を離れた）

少年野球の歓声だけが響く。

しばらくして、車のエンジン音。
男①が戻ってくる。
手にはコンビニの袋。
インターホンを押し、

男①　「大石でーす」

インターホンから看護師の「はーい」という返事。
男①は消毒を済ませ上手に去る。
そして温かいほうじ茶を看護師に渡して、戻ってくる。
男①は辺りに男②がいないことを確認し、スマホを取り出し、電話をする。
しかし相手は出ない。
コンビニで買ったオニギリを取り出し、食べようとした時に、スマホがなる。

男①　（スマホに）おう。病院に戻った。
いない。さっき話した人、いない。
（やや通信状況が悪い）（少し大きな声ではっきりと）さっきの話の人、いない。

……。うん。いま病院の前。ほうじ茶渡した。
……。わからん。警察とは言ってるけど、手帳は見てないから。
え？あ、カコちゃん？
わかんない。だって看護師さん全然教えてくれないんだもん。ほうじ茶渡しても、「はいどうもー」だけ。ずっと外で待たされてるし。
え？マジ？そんなに時間かかんの？
でも破水みたいなのあったじゃん。ってことは、もう出だしたってことでしょ。
……。マジかよ。じゃ、このまま夜になるかもしれないんだ。
えぇ！明日の朝まで？？……。
大丈夫大丈夫。いいよ交代とか、ゆっくり休んで。いいって弁当とか、コンビニあるから。
大丈夫。ちゃんと休まないとクセになるから、腰は。

男①はオニギリを食べ始める。

男①　（食べながら）鮭。（値段を見て）二百三十円。はいはい。無駄使いしませんよ。
……。（レシートを取り出し）一万二千三百二十九円。
えっと、ブラジャーが二千五百円してるわ。
……いいじゃん。これはウチらで持とうよ。ウチらからのお祝いってことで、
……聞いてる？
え？
そのオッサン？
わかんないけど、俺と同い年くらい。そう、オヤジ。
……。いや、でも俺よりはちゃんとしてたよ。つーか、俺らの周りにはいない感じ、なんか観光客が服装間違えました、みたいな。ここの人間じゃないかも……。
（病室を見上げる）見える。
３０２。
カーテンだけ見える。窓しまってる。
やり取りは看護師さん通じて。温かいほうじ茶が飲みたいんだって。
……。はい。がんばりまーす。

スマホをきる。
残っていたオニギリを全部ほうばると、怒りがこみ上げてくる。

男①　（怒って）大石――――――！！とっとと捕まれ！バカが！

自分用に買ったほうじ茶を飲む。

スマホが鳴る。

男①　（スマホにでる）どした？……。

うん。なんか、ゴルフとか行きそうな格好。高いんじゃないの？わかんないけど。

……ヤクザ？

ちょっと待って、何ヤクザって？大石って、一人でやってたんでしょ？

一人でとって、一人で寿司屋とか料亭とかまわって、

……縄張り？

え、密漁にも縄張りあんの？

……ヤクザ、ヤクザかぁ…。

でも、ここ産婦人科よ、カコちゃん妊婦だよ。まさかヤクザだって、病院までは。

……帰っていい？

だって万が一ってこともあるし。

……はい。そうです。

一番大変なのはカコちゃんです。はい。がんばりまーす。

男①はお茶を飲む。

そしてインターホンを押す。

しばらくして看護師がでる。

看護師の声　はい。

男①　あ、３０２号室の大石カコの、夫です。

看護師の声　はい。

男①　あの、どんな感じですかね？あの、まだ病室ですか？それとも何か手術室みたいなとこ移りました？

看護師の声　ちょっと待ってくださいね。

男①　はーい。

いつの間にか男②が立っている。

男②はコンビニの袋をさげている。（なかみはおにぎりとお茶）

☆これ以降、ト書きで「お茶を飲む」と指定されている箇所以外でも、男①②は演技でお茶を飲んで良い。

男①はそれに気がつく。

男①は緊張のあまり固まる。

看護師の声　お待たせしました。

男①　……。
看護師の声　えっと、３０２号室の大石カコさんですねー。えっと。まだ病室におられますね。
男①　そうですか。
看護師の声　こちら来られてすぐにですね。陣痛を促進するお薬注射してます。その薬がですね、もうじき効いて来るんで、それで陣痛が強くなったら、お部屋を移動する感じです。
男①　あ、そうですか。あの、眠れてます？
看護師の声　はい、おかげさまで。
男①　いや、あの、本人、
看護師　あ、（大爆笑）妊婦さんは眠れませんよ。陣痛が弱いだけで、もう股に挟まってる感じですから。
男①　ん？何が？
看護師の声　股に赤ちゃんの頭が挟まってる感じですから。
男①　あ、なるほど。
看護師の声　あ、それで、奥様から伝言がありまして「温かいほうじ茶が飲みたい」だそうです。
男①　了解でーす。

インターホンの会話終り。

男②　（ジャケットの内ポケットをチラッと見せて）（恥ずかしそうに）警察だ。
男①　え？
男②　（再度、同じ仕草をして）警察だ。
男①　あ。（緊張がほどける）良かったー。マジでヤクザかと思った。
男②　ヤクザ？
男①　いや、すみません。ウチのが変なこと言うもんだから。
男②　どんな？
男①　いや、なんか。大石に縄張り荒らされたヤクザが……、もう一回、手帳見せてもらえます？
男②　そんな何回も見せるもんじゃないよ。
男①　でも、さっきは今日は休みの日だからって、
男②　（再度、同じ仕草をして）警察だ。
男①　もう少しゆっくり、
男②　（少し激高した感じで）ヤクザと間違えるなんてひどいなー。
男①　すみません。
男②　僕はあれだからね。奥さんをそういう連中から守る為に、ここに来たから。

男①　あ、そうなんですか。
男②　そうなんですよ。
男①　じゃやっぱり大石は、ヤクザとトラブル？
男②　そうねー。
男①　やっぱり縄張りですか？
男②　……。
男①　いやウチのがね、密漁にも縄張りがあるって、
男②　……。そうねー。
男①　まったくあのバカ！
男②　えっと、私は警察なんだけど。この街の警察じゃなくてね。東京から来たんだけど。
男①　暑いでしょ。
男②　え？
男①　いや、よくいるんですよ。この辺、寒いイメージあるから、この時期でもまだ寒いだろうって、そういう恰好で来る人。
男②　……。
男①　すいません。よく言われるんです。話の腰を折るなって。ウチ居酒屋やってるんですけど。ウチのカウンターには俺に折られた話の腰があっちこっちに転がってるっていう……。（「どうぞ話を続けてください」のジェスチャー）
男②　それで今回の大石のケースについて、まぁレポートしなきゃいけなくてね。改めて、ちょっと、知ってること、全部、まるっと、教えてもらえますか？
男①　まぁ、だから、やっぱ、コロナかなぁ。
ま、この辺、アワビとかウニとか、わりと簡単に取れるんですよ。ナマコとか。もちろん犯罪ですから、それはわかってるんですけど。
ウチのが言うに、やっぱコロナかな。それで生活が苦しくなって、わかっててもやっちゃう奴が、チラホラいて。
まぁ大石はそれを大規模にやっちゃったっていう。
男②　大石の仕事は？
男①　最初の頃は、なんだろ。まぁプラプラしてたって感じ。フリーター。
でも、それじゃいかんぞって、ウチのと二人でやいのやいの。その頃にはもうカコちゃんと付き合ってたみたいなんで。ちゃんと定職につけって説教して。
でもこの街でしょ。仕事もないし。
でもカコちゃんの家、わりと大きな家があるんですけど、住む家はそこでいいし。わざわざね、都会出て狭いわ高いわのアパート借りるのもバカらしいし。
あ、カコちゃんは高校の時からウチでバイトしてたんですよ。さっき話した「グラタンうどん」もカコちゃんのアイディアで。あれ？グラタンうどんの話しました俺？
男②　大石の、仕事の話を、聞かせて下さい。

男①　ソーラーパネルの営業です。大石、そこ就職しました。それでまぁ、よかったよかったって、ウチらもお祝いして。まぁ結婚。でも、営業の仕事、全然向いてなかったみたいでね。あれって何百万もするんでしょ？

男②　え？

男①　ソーラーパネル。

男②　あー、

男①　ピンポーンって押して、何百万円もするの買いませんか？って、そりゃ売れませんよ。おまけにコロナでしょ。ピンポーンって押すのも憚られる感じになちゃって。で、カコちゃん妊娠。

男②　……。

男①　カコちゃん家（ち）、海のそばなんです。アイツもバカじゃないから、毎日海を見ながら「どーすっべぇ」って悩んでたんでしょうね。で、密漁。

男②　奥さんは、密漁のこと、知ってるんですか？

男①　（首を横にふる、わからんという意味）。

二人は黙り込む。

向かいにあるグランドの声援が聞こえてくる。

突き抜けるような金属バットの快音。

保護者たちの声援がたかまる。

男①　（向かいを見て）お、おぉ！……イケイケ、イケる。つっこめ！

三塁打だ。

男①はしばらく拍手する。そしてやめる。

男①　今朝はもうめちゃくちゃだったんですよ。朝起きてウチのが腰痛いって動けなくなって。そうこうしてるうちにカコちゃんが近所寄ったからって顔出してくれてましてね。ウチの玄関またいだ瞬間にうずくまちゃって。そのまま俺の車に乗っけて、ここ担ぎ込んで入院。いくら電話しても大石でないし。そしたら昼に、ウチの店に警察の方が来て「大石はどこだ！」って。アイツ指名手配されてやんの。もうめちゃくちゃ。

男②　じゃ、奥さんは旦那が逃げてることも。

男①　どうでしょ。……でもスマホとかありますしね。病室でもさわるだろうし。いや、それどころじゃないか。頭、挟まってるんだもんね。……まぁ、でも、なんか、気づいてるかもしれませんね。

向かいのグランドでは攻撃側の逆転のチャンス。

男①　（グランドに向かって）思いっきり、いけー！

打音。

男①　お！

しかし内野フライ。

保護者達の落胆の声。

男①　（グランドに向かって）どんまいどんまい！気にすんなよ！

……。

俺もやってたんですよ。少年野球。六年間、ずっと補欠。

最後の試合だけ代打で出る予定だったんだけど、一つ前のバッターが三塁打打っちゃって、逆転のチャンス。

で、俺が代打じゃいかん、って急遽俺の代打なくなりましてね。

観に来てたウチの親が激怒して、監督と大喧嘩。

でも、子供心に思ったんよ。

俺が監督でも、同じことするなぁって。

俺じゃダメだって、自分でも思ってたから。

男②　大石は、いくつですか？

男①　二十、二か、三。

男②　……。

男①　まぁ、気持ちはわかりますけどね。俺もそれぐらいの歳、全然金なかったし。あの頃に子供とか出来てたら、マジ、無理だし。

男②　……。どうして、そこまで、その、カコさんのことを？

男①　え？

男②　いや、だってお店の準備もあるだろうし、奥さんだってぎっくり腰なんでしょ？どうして、

男①　どうしって言われても、そういうもんでしょ？

男②　「そういうもん」

男①　違います？

男②　いや、私には、

男①　（向かいを指さし）見てください、あっちの駐車場。ゴツイ車ばっかり。ワゴンの、スライドドアがズラー。お父さんも、若い。

男②　……。

男①　ま、でも。あの頃に子供、出来てた方が良かったのかなぁ、とも思いますね。
いや、うち子供いないんで。
いや、やっぱ無理か？

男①は照れたように笑う。

男①　結婚式も、二次会でウチの店来てくれて。
あ、そもそも最初は披露宴をウチでやりたいって言いだして。
きたね～店ですよ。床なんかいくら掃除しても、ペタペタ。
いくら何でもそりゃ無理だって断って。
だから二次会で、ウチに来てくれてね。狭い部屋でウェディングドレス着て。
うちら二人のこと、あ、カコちゃんも両親いないのよ。
それでウチら二人のこと、お父さんとお母さんみたいに思ってるって言ってくれてね。

突如、男②は泣き始める。

男①　（泣く男②を見て）え？
男②　（泣きながら）ありがとう！
男①　は？

男②はもはや号泣している。
しきりに何か言いつつ、男①の肩を抱いたり、握手を求めたり、拝んだりするが、
何を言っているかわからない。
男①は「刑事さん落ち着いて」と言って宥める。
やがて少し落ち着き、

男②　ほうじ茶、買ってきます！
男①　は？
男②　お願いします！私に買わせてください！
男①　いや、でも、
男②　えらい！（拍手）
男①　いや、別にえらかないですよ、
男②　素晴らしい！

男①は照れくさい。
行きたがる男②を制し。

男①　ほうじ茶。ちょっと行ってきます。

男①は下手に去る。

男②　３０２。

建物の三階あたりを見る。

手合わせ、ぶつぶつとつぶやく。

男②　（小さな声で）がんばれ、がんばれ、がんばれ、がんばれ、がんばれ（つぶやき続ける）……

舞台溶暗。

シーン②　がんばれ大石

シーン①から３０分ほどたった。

午後３時頃。

（男②が買った「おにぎり」はもうない。お茶のみ残っている）

男①は慌てた様子。

男②は困惑した様子。

男①　（スマホに向かって）大丈夫。いま横に警察の人いるから、何があったか、話して。

落ち着いてね、ね、いい、変わるよ。

男①はスマホを男②に渡す。

男②　どうも警察です。

えっと、落ち着いて、ね。ゆっくり話してもらえますか？

１０分ほど前ですね、えぇ。二人組の男。「大石はいるか」と、なるほど。

年齢とかわかります？

ジジィ？え、ジジィが二人？

へー。

「預かってるだろ」

ん？

どういう意味だろ。
奥さんが「は？」って答えたら、
「しばくぞゴラぁぁあ」と、急に関西弁。
男①　（スマホを奪い）あのさ、それで、大石が警察に追われてることは、おじぃちゃんたちに言ったの？
…言った。
で、どうなった？
……じぃちゃん達、出て行った。
……。大丈夫。大丈夫だよ、ちゃんと警察の人いるから。東京からエース級がきてるから。
（スマホを渡す）
男②　（スマホを受け取り）ま、その様子だとアレですね。アレするほどのアレってことはないと思うんですが、万が一アレしてもアレなんで、一応アレするように、私からも県警にアレしておきます。大丈夫です。
……そちらも心配なさらずに、奥さんとカコさんの安全は我々が必ずお守りします！（スマホを渡す）
男①　（スマホに）どう、腰は？
いったんそっち帰るし。
こっち？こっちはほうじ茶8本目。全然変化なし。
まだ陣痛が弱いんだって。
大丈夫。一回そっち帰るし。

男①はスマホを切る。

男①　ヤクザですか？
男②　まぁそうなんだろうね。
男①　「預かってる」？
男②　んーーー。
男①　いま捜査はどうなってるんですか？
男②　ん？
男①　いや、大石、追いかけてんでしょ？
男②　いや、まぁ、もうそろそろ捕まえますよ。
男①　そろそろ？
男②　ぼちぼち。
男①　ぼちぼち？
男②　大石にとってもその方がいいんです。捕まってしまえば、ヤクザに追われなくてすみますから。

男①　じゃ、わたし一旦、
男②　はい。ご苦労様です。

男①は上手にさる。
男①の車のエンジン音。
車は出て行く。

男②　（何かを思い出し）……「預かってる」？……

上から物音がする。
驚いて男②は病室を見上げる。
３０２号室の窓が空いている。

男②　（病室に向かって）どうも。……。大石、カコ、さん？ですか？
……見てました？今の僕らの会話……。
もしかして、そのヤクザが探してる荷物って……。
さっき、あの人が君の病室に運んだヤツかな？
だとすると、どうなるんだろ？あれ？どういうこと？

病室からヒラヒラと紙が落ちてくる。

男②　（紙を読み）「だれ？」。
僕はね、警察です。
でもね、君の味方です。
信用して。
あ、嘘。警察ってのは嘘。あのさっきの人がそう思ってるから、そうした方が楽かなって思って、警察ってことにしたけど。
本当は、本当に、ただの、君の味方。信用して。

ヒラヒラと紙が落ちてくる。

男②　（紙を読む）「なぜ？」。
僕は……君のお母さんに頼まれたんだ。
古い友達でね、僕ら。
連絡が来たんだ。お母さんから。僕も久しぶりでね。
もう二十年ぶりくらいかな。

知ってる、と、思うけど…、
お母さん、身体の具合悪いんだ。ずいぶんしんどそうだった。
君に会いたいって。

ヒラヒラと紙が落ちてくる。

男②　（紙を読む）「死ね！」
……。
でも、楽しい思い出もあったでしょ？中学までお母さんと一緒に住んでたんだよね？
そりゃ辛い日もあったろうけど、毎日ってわけじゃ……
もうやめよう。こんな話。
……。
結婚おめでとう。
お母さんから教えてもらった。この病院のことも。きっとここだろうって。
そのカバン。何なら僕が預かろうか？
中は見ない。
約束する。
もちろん、赤ちゃん無事生まれて、騒ぎが落ち着いたら、君たちに返す。
約束する。
そりゃそこにあればヤクザからは守れるかも知れない。
でも、警察だって調べるよ。
いくらくらい儲けがあったのか、警察だって知りたがる。
さぁ、僕に任せて。

ヒラヒラと紙が落ちてくる。

男②　（紙を読む）「だれ？」
……。
僕は、無責任で、怖がりで、自分勝手で、
子供で、わがままで、
君に殺されたって文句が言えない。
……。
でも、今は、これからは、君の為に、何かしたいんだ！
さぁ！僕にそのカバンを預けて！

病室からは何の反応もない。

向かいのグランドでは試合が終わった。
まばらな拍手と、歓声が聞こえてくる。

男②　だよね。今さら……。さよなら。

男②は名残惜しそうに下手に去る。
少ししてインターホンから、看護師の声。

看護師の声　（慌てた感じで）３０２号室、大石様。奥様、分娩室に入られました！

慌てて戻ってくる男②。

男②　（インターホンに）３０２号室、大石です！よろしくお願いします！！

看護師の声　（慌てた感じで）立ち合いの際はまたお知らせいたします。

男②は興奮してそこらを走りまわる。
意味なく腕立て伏せをしたり、スクワットをしたりする。
少し休んで、やや西に傾いた夕日を拝み、パイプ椅子のパイプを全力つまむ。

男②　ごららららぁあああああ！

みるみる顔は赤らむ。
すごく疲れる。

男②　……（息を切らせて座り込む）。

男②は煙草を取り出す。
そして禁煙であることを思い出し、煙草をしまう。
アクビをする。
分娩室のことを思い、アクビしたことを申し訳なく思う。

車のエンジン音。
男①が戻って来た。
エンジンが停止し、男①下手より登場。

男①　（向かいのグランドを見て）お、試合終わった？

男②　分娩室、入った！
男①　入った！

男①と男②は興奮してそこら中を走りまわる。
意味なく腕立て伏せをしたり、スクワットをしたりする。
少し休んで、やや西に傾いた夕日を拝み、パイプ椅子のパイプを思い切りつかむ。

男①②　ごららあああああああ！

二人ともみるみる顔が赤らむ。

男①②　……（息を切らせて座り込む）

男②は煙草を取り出そうとするが、禁煙であることを思い出す。

男①　あ、そうだ。

男①はスマホを取り出し、「カコちゃん分娩室入ったよ」と、妻にLineする。

男①　（Lineを終えて）よし。

短い間

男①　どっち、勝ちました？
男②　は？
男①　いや、試合。
男②　見てませんよ。
男①　いい試合でしたよ、たぶん。
男②　奥さんどうでした？
男①　あぁ落ち着いてました。なんかヤクザって言っても、スゲーおじぃちゃんだったみたいで、
男②　でもヤクザはヤクザですよ。

男①のlineに返信がはいる。
男①はそれを確認し、

男①　よし。（病室を見上げ）がんばれ！お母さん！（男②に）あ、妻からのメッセージ。
男②　あぁ、
男①　見てくださいよ。皆で掃除して。トンボって言うんですか？グランド整備。いい景色じゃないですか。
男②　まぁ。
男①　あの、妻が言ってたんですけど、
男②　はい。
男①　いや、あの素人の推理みたいな話なんですけど、
男②　なんですか？
男①　いや、ほんと気にしないでください。
男②　だから、何ですか？
男①　いや、まぁ、いま言う話じゃないんですけど、
男②　じゃ言わないでください。
男①　ヤクザが探してるカバン。預かってるだろって言ってたカバン。あれ、いま病室にありますよね。
男②　さっきアナタが運んだカバンですよね。
男①　いや、なかみは全然知りませんでしたよ。ほんと入院の準備のアレだと、
男②　中身なんだと思います。
男①　いや、妻が言うには、……密漁の売り上げじゃないかって。
男②　でしょうね。
男①　いや妻が言うに、旦那が密漁の仕事してるのに、同じ家にいて気づかないわけないないって、
男②　……。
男①　共犯、
男②　共犯？？
男①　共犯になりますか？その場合、カコちゃんも刑務所ですか？
男②　……。
男①　そしたら産まれた赤ちゃんは、
男②　（大声で）わかりません！
男①　お願いします。悪い奴じゃないんです。いや、やったことは悪いことですけど、二人とも必死だったんです。
男②　いや私に言わないでください。私は、
男①　いや見逃してくださいとかそーゆうお願いじゃないんです。
男②　いや、
男①　いや、刑事さんわかってください。正直、この街、仕事ないんです。ほんと仕事ないんです。

男②　わかってます。
男①　わたし裁判所行きますから、
男②　は？
男①　何でも証言します。絶対わかってもらえると思うんです。ほんと二人とも必死なんで。
男②　大丈夫です。きっと罰金で済みますから、
男①　いくらくらいですか？
男②　それはわかりませんけど。
男①　なんであんな一生懸命生きてる子が、……、
男②　……。
男①　今日はじゃ、ずっとここに居てくださるんですか？
男②　あ、えぇまぁ、カバンのこともありますし、
男①　ありがとうございます。
男②　いえ、

男①は病室を見上げる。
そして祈る。その姿を男②は黙って見ている。
男①は前を向くと、赤ん坊を抱く仕草をはじめる。

男①　刑事さん、ご家族は？
男②　あ、いや、まぁ、
男①　独身ですか？
男②　ええ。
男①　いやウチも妻と二人なんですけどね、色々練習しとかなきゃって思って、
男②　練習？
男①　刑事さんも、どうです？
男②　え、
男①　だってやることないでしょ、男はこういう時、
男②　え、何の練習ですか？
男①　ゲップ。
男②　げっぷ？
男①　ゲップ、赤ちゃん自分でできないでしょ。だから手伝ってあげなきゃいけない。さぁ立って。
男②　え、でも、
男①　まだお若いんだから、これから何あるかわからないんだし、
男②　はぁ、
男①　じゃ、想像してください。おっぱいを飲み終えた赤ちゃん。お母さんが言います。ゲ

ップはお父さんの仕事ね。さぁ受け取って、

男②は無対象の赤ん坊を受け取る仕草。

男①　はいダメ！

男②　まだ何にも、

男①　アナタ煙草吸うでしょ？そのジャケット煙草の匂いするでしょ？脱がないと、っていうか赤ちゃんいるんだからまずは煙草やめましょうよ。

男②　いや、これ練習でしょ？

男①　真剣にやらなきゃ練習にならないでしょ。

男②　まぁ…。（堂々と）煙草、やまめす！

男①　なんでだろ？なんか偉そうに聞こえた。赤ん坊のために煙草やめてあげた俺、みたいな変なナルシズム感じた。邪魔だなーそのナルシズム。

男②　（卑屈に）煙草、やめます。

男①　あれ？もしかして被害者アピールしてる？俺、我慢してるぞーみたいな変な自己顕示欲を感じる。邪魔だなーその自己顕示欲。

男②　（陽気に）煙草、やめれて嬉れピー！！

男①　（冷たく）ジャケット脱ぐ。

男②はジャケットを脱ぎ、再度チャレンジ。赤ん坊を抱くマイム。

男①　ダメ！

男②　え、

男①　タオルを自分の左肩に置いとかないと、

男②　え？

男①　そのまま吐いちゃったらどうすんの？洗濯物増えるだけでしょ。

男②　ごめんなさい。全然わかんないです。

男①　（マイムで実演する）ガーゼタオルを肩に置く、左手で赤ちゃんの頭、右手でお尻。赤ちゃんの口にタオルあててやさしく（背中をトントン叩く）（自分で赤ちゃんのゲップ音）ゲプ。

男②拍手。

男①　これを夜中の二時とか、五時とかにやるんですって、何回も。自分でゲップできるようになっても一年間は夜泣きで起こされる。

男②　……。

男①　そして二年たちました。
男②　え、まだやるんですか？
男①　想像してください。よちよち歩きはじめました。保育所にも入れた。片言ながら「ママ」「パパ」も言えるようになった。
男②　（嬉しそうに）おぉ！
男①　しかしそれは新たな地獄の幕開け。保育所でインフルエンザが大流行。まずお母さんが倒れる。続いてお父さんもフラフラ。高熱の娘は何故かハイテンション。リビングに漂うのはうんちんの匂い。さぁオムツ交換いってみよう。

男①はヨチヨチそこらを歩き回る。
男②は体調不良でフラフラの様子を演じる。

男②　パンツかえるよー。

男①は幼児になりきって、そこいらを歩き回る。

男②　パンツ―、

男②は床に崩れ落ちる。

男②　お願い…パンツ、
男①　くでぃーむ。ほじつくでぃーむ。
男②　あ、ダメ、それオモチャじゃないよ、ないないして、ダメ、
男①　くでぃーむ、ほじつくでぃーむ、
男②　ダメ、保湿クリームはないないして、
男①　ほじつくでぃーむ、ふだぁ、
男②　保湿クリームのフタあけちゃダメ、

男②は気力を振り絞り、保湿クリームを救出。
男①を仰向けにねかせ、オムツ交換の動作。
男①の指導を受けつつ、服を脱がせ、お尻を拭き、新しいオムツと交換し、便をトイレに流し、汚れたオムツを匂いが漏れないビニール袋につめて、汚物入れに放り込む。

男②　で、できました！
男①　（冷たく）だから？

男②　……。
男①　がんばったら褒めてもらえると思うの、やめた方がいいですよ。
男②　……。
男①　じゃ次は、
男②　まだやるんですか？
男①　想像してください。中学生になりました。高校受験を控えた中三の夏。わりと良い進学校に行ける実力がありながら、友達が受験するからという理由で、わりと良くない学校を選ぼうとする我が子に受験と友情は、
男②　もういいです。
男①　え？
男②　あなた厳しすぎますよ。教え方がキツイ。設定もキツイ。
男①　すみません。
男②　だいたい何ですか、「褒めてもらえると思うのやめた方がいい」って、そういう考え方、古いんじゃないですか。
男①　いや、私は、
男②　そんな考えの人がいるから誰も子育てしようとか思わないんですよ。
男①　いや私は子育てがどれだけ大変か、
男②　でもその伝え方じゃ逆効果でしょ。子育てとは、夫婦で励ましあって、

突然、男②は自分の頬を殴る。

男①　え？！
男②　気にしないでください。
男①　でも、
男②　いやわかりますよ。特にこれから父親になる男性には、厳しく言うべきです。実際いい加減な父親はまだまだいっぱいいま、

またも男②は自分を殴る。

男①　ちょっと！
男②　これからの時代は男とか女とか関係なく、

またまた男②は自分を殴る。

男①　……。
男②　世の中全体で支えあってゆく、そういうことを伝えないとダメなんじゃないでしょ

うか？
男①　はぁ……。

奇妙な雰囲気。

男①　そうですよね。もっと楽しいもんですよね、子育て。いや、なんか勝手に緊張しちゃって。妻にはまだ相談してないんですけど、カコちゃんの子育て、出来る限りの応援はさせてもらおうと思ってて、
男②　……。
男①　いやもちろん出来る限りですよ、変なおせっかいはしちゃけないってわかってますから。でも立ち合いまでやらしてもらうわけですから、なんか他人とは思えなくて。それで勝手に緊張しちゃって。すみません。
男②　ん？
男①　いや、だから、赤ちゃん育てるの、出来る限り応援、
男②　いま何て言いました？
男①　ん？
男②　何をさせてもらうと？
男①　「立ち会い」？
男②　ん？？
男①　あれ、知りませんでした。コロナだけど、最後の最後だけ夫は入れるんです。
男②　アナタが？
男①　立ち会います。
男②　逮捕します。
男①　は？
男②　偽証罪、及びプライバシーの侵害です。
男①　いやだってそういうルールですから、
男②　でも嘘でしょ。あんたバイト先の店長じゃないですか。
男①　オーナーです。
男②　どっちでもいいですよ、そんなこと、
男①　いやいくら警察だからって、
男②　警察じゃなくたって止めますよ。第一、カコさんは承知してるんですか？
男①　いや、それは……、
男②　いいですか、想像してください。ここは分娩室です。何時間にも及ぶ、想像を絶する痛みと苦しみの果てに、今まさに新しい命が産み落とされようとしている。最後の気力を振り絞るカコさん、「お父さん入られます」と看護師さんの声、廊下を駆ける足音、分娩室の前で大きく深呼吸、そして扉が開くとバイト先の店長が、

男①　「がんばれ」
男②　陣痛ピタ！目が点！赤ちゃんも気つかって引っ込みますね。
男①　いいんです。それくらい覚悟してますから、
男②　あなたの覚悟なんて聞いてません。
男①　でも、
男②　奥さんはなんて言ってるんです？
男①　え？
男②　あなたの奥さん。
男①　相談してません。
男②　やめましょう。誰も幸せにならない。
男①　でも、でも可哀そうじゃないですか。最後まで一人ぼっちなんて、
男②　いや、
男①　そりゃもちろん頭側に立ちます。背中さするくらいはお願いされたらするかもしれません。でも真正面には絶対、
男②　私が立ち会います。
男①　は？
男②　頭側に立ちます。
男①　いや、違うでしょ。だってあなた全然関係ないでしょ。
男②　私だって応援したいんです。
男①　いやいや、
男②　頭側に立ちます。
男①　想像してください。ここは分娩室です。何時間にも及ぶ、想像を絶する痛みと苦しみの果てに、今まさに新しい命が産み落とされようとしている。最後の気力を振り絞るカコちゃん、「お父さん入られます」と看護師さんの声、廊下を駆ける足音、分娩室の前で大きく深呼吸、そして扉が開くとどこのだれかもわからないオッサンが、
男②　「がんばれ」
男①　殺されますよ。
男②　覚悟してます。
男①　だから、あんた関係ないでしょ。
男②　関係ないからこそ良いメッセージになると思うんです。
男①　は？
男②　「あぁこんな関係ないおじさんも私を応援してくれているんだ。私は一人じゃない」
男①　あんた正気か？
男②　あんたが立ち会うくらいなら、わたしが行きますから、
男①　じゃ、わたし立ち会うのやめます。
男②　じゃ、私が立ち会います。

男①　警察、変な人多いなぁ。
男②　私は父親なんです！
男①　ちょっと落ち着いて、
男②　私が立ち会います！

二人は（相撲の）「立ち合い」の姿勢。
勝負する。☆勝敗は現場に任せます。
どちらが勝つにせよ。勝敗が決した後に男②は叫ぶ。

男②　私の娘なんです！
男①　は？
男②　カコは、私の娘なんです。

男②は写真を取り出し、男①に見せる。

男①　……。

沈黙。

男②　ありがとうございます。アナタ方ご夫婦の支えがなければあの子は生きていけなかった。本当にありがとうございます。

男②は深々と頭を下げる。
男①は椅子を持って、男②から離れる。。
そして男②の存在を拒絶するかのように背を向けて座る。

男②　私はバカでした。今もバカです。
ちょうど今くらいの季節。
妻の実家があるこの街にやって来ました。もう二十一年も前です。
きっと今と同じように、桜の葉も揺れていたんでしょう。
でも全然憶えてない。必死だったんです。
駅前の喫茶店に義理の父と二人きり、お互い同じことを言いました。
「どうするんだ」そう言われても、
「どうにかします」そう答えるしかありませんでした。
結局、妻と赤ん坊…カコは私の仕事が落ち着くまで、この街で暮らすことになりました。
私一人、東京に戻りました。

そして、私は、父親にならなくちゃいけなかった。
……でも、なれませんでした。一人暮らしの頃と何ら変わらない生活をしてしまった。
仕送りもだんだん疎かになって、二年も経たない内に、ここにハンコを押してくださいって、郵送されてきて。
それで終りです。
男①　本当に苦しんでる人は、そんな話しませんよ。そんな風に昔を語りません。
男②　……。
男①　居酒屋やってると、色んな人来るから、わかるんです。本当に苦しんでる人、本当に反省してる人は、黙ってます。黙って苦しみに耐えるしかないんです。
男②　……。
男①　なんで、あんたみたいな人が父親になれるんだよ！

沈黙。

男①　失礼ですけど、カコちゃんからお父さんの話、一回も聞いたことありません。おじぃちゃんのこととか、お母さんとの、その、色んな話とかは何回も聞いたけど、お父さんの話はゼロです。悪口もゼロです。存在してないんです。
男②　はい。
男①　アンタ、結局あれだろ？
東京での一人暮らしが楽しくてしょうがなかったんだろ？
下北沢やら高円寺やら中野やらで、夜遅くまでグダグダ遊んでたんだろ？
そら楽しいわな！
どうせ周りもそんなヤツばっかりで、友達のライブ行ったり、友達の友達がつくってる映画とかにちょこっと出たりしてたんだろ？
でもな、その時、カコちゃん何してたか、アンタ知ってんのか？
母親は中学ン時に出て行った。おじぃちゃんの年金だけが頼り。高校入ってすぐウチでバイト。でもおじぃちゃん倒れて。その面倒もぜんぶカコちゃんが見てたんだぞ。
アンタが、東京で、永遠の若者たちとグダグダやってる時！
カコちゃん、高校生なのに、立派におじぃちゃんのお葬式やって……。

男①はみるみる涙をあふれさせる。

男①　お前のアカウントを炎上させてやりたい！
男②　すみません。
男①　あんた何しに来たんですか？
男②　カコの母親から連絡がありまして。身体壊したらしく。もう長くないらしくて。彼女

からカコが結婚したこと、赤ちゃんが産まれることを知らされて。彼女もすごく心配して
て、私に会いに行ってほしいと。
男① 会ってどうするんです。
男② 出来る限りのことはさせてもらいます。お金のことはもちろん、気持ちの面でも、
男① 悔しいでしょうね。
男② え？
男① カコちゃん。なんか足元を見られるみたいな感じで、
男② そんな、
男① だってそうでしょ。存在すらしてなかった父親が急に現れて、お金くれるなんて、
男② もちろん都合のいい話だと思います。だから父親面する気は毛頭ありません。
男① 今さら父親になれるなんて思わない方がいいですよ。
男② はい。
男① なんで「はい」なんだよ！今からでも父親になれよ！
男② 私にその資格は、
男① そりゃなれないよ。今さら父親なんて馬鹿にすんなって話だよ、でも、でも、それで
もアンタ父親だろ？同じ血が流れてるんだろ？
男② でも、
男① だから、なれよ！今からでも父親に、
男② はい。
男① うんにゃ！今さらなれると思うなよ！
男② え？
男① もーどうすんだよ！全部アンタのせいだからな！アンタのしたことは取り返しつか
ないの！
男② はい。
男① せっかく赤ちゃん来てくれたのに、育てないって。犯罪じゃねーか。いいか、世の中
にはな、
男② ……。
男① なれ！今からでも、アンタ父親になれ！
男② でも、カコが何て言うか、
男① お願いする立場で何言ってんだよ！
男② ……。
男① 父親になりたいんだろ？その為にここに来たんだろ！
男② ……はい。
男① そら何十年かかるかわかんないよ、もしかしたら最後まで「お父さん」って呼んでく
れないかもしれない。でも、アンタ、罪を犯したんだ。ちゃんと償いはしろよ。
男② はい。

男①　……。応援するよ。
男②　え？
男①　アンタじゃないよ。俺はカコちゃんと産まれて来る赤ちゃんを応援するの。二人には大石だって必要だし、アンタだって必要かもしれない。だったらアンタの償い、俺も協力するって言ってんの。
男②　……殴ってください。
男①　は？
男②　殴ってください！
男①　なんで？
男②　早く！
男①　殴られて（不意に赤ん坊の声を聞いた気がして、振り返り）ん？
男②　ん？
男①　いま、なんか……赤ん坊の、

男②はインターホンを押す。

男②　（インターホンに向かって）３０２号室の、大石ですけどーー。

しかし返事はない。
することがない二人。

男①　（先ほどの続きをしゃべり出す）殴られて、それでアンタの気持ちが軽くなるなら、俺は絶対に殴らない。

インターホンから看護師の声。
二人はインターホンにかけよる。

看護師の声　（忙しそうに）はい。
男①　３０２号室の大石カコの、夫ですけど、いま、どんな感じでしょ、
看護師の声　ですから今、分娩室です。でもね、お父さん。まだまだ時間かかるかもしれないんで、お気持ちはわかりますが、じっと待っててもらえます？
男①　あ、そうですよね、はい。
看護師の声　奥様、いま頑張ってますんで。

インターホン切れる。
男①と男②は興奮してそこら中を走りまわる。

意味なく腕立て伏せをしたり、スクワットをしたりする。
少し休んで、やや西に傾いた夕日を拝み、またもパイプ椅子を全力でつかむ。

男①②　ごらあああああああ！
男②　これなに？
男①　おうらぁ！（勢いのまま男②を殴る）あ、ごめん。
男②　（泣きながら）ありがとう！あなた方夫妻と出会えて、カコは幸せです。
本当に良かった。ありがとう、ありがとう！
男①　泣いても何も変わらないからな、いくら泣いたってアンタの罪は、

男②は泣きながらスマホを操作し、

男②　（ポチる）おりゃー！
男①　どうした？
男②　チャイルドシートを、買いました！！！
男①　まぁ必要になるわな。
男②　（操作し、ポチる）おりゃー！
男①　何？
男②　ベビーベッドを、買いました！！！
男①　うん、助かる。
男②　（操作し、ポチる）おりゃー！
男①　次はなに？
男②　赤ちゃんの鼻水チューブで吸う機械、買いました！！！
男①　わかった。アンタの覚悟は十分伝わった。今はそれくらいで十分だから、

男②は泣く、男①は抱きとめてあげる。
だんだん、ゆっくり興奮が冷めて行く。
ゆっくりゆっくり二人は椅子に座り、することがない二人。

男②　あ、
男①　ん？
男②　（マスクを外し）歯の詰め物が、
男①　え？
男②　（指を口に入れ）奥歯に詰めてたのが、
男①　ごめんなさい。俺のせい？
男②　いえ、全然、全然です。

男②は外れた詰め物を、また詰める。

男②　はまりました。

短い間

男①　もしかして、五十三年生まれですか？

男②　五十四です。

男①　あ、やっぱり。

男②　え？何が？

男①　なんか、色々ハザマですよね。

男②　ハザマ？

男①　「男らしさ」とか意識しなくていいって、わかってんのに、なんか最後はね。

男②　「男らしく」ありたい。

男①　でも、できない。

二人は笑い合う。

ただし、男①はありふれた苦笑い。

男②は今にも泣き出しそうな極めて苦い笑いである。

男①　（突如大声で）俺、最高！！！

男②　え？

男①　ウチの親父が教えてくれたんです。お前は命がけでこの世に生まれてきた。お前が産まれたとき、とうちゃんは本当に感動した。ありがとう。とうちゃんはお前とかぁちゃんのこと大っ好きだ。お前はすごい。えらい。素敵。かっこいい。最高だ！

男②　はぁ。

男①　ほら、一緒に叫びましょう。（大声で）俺、最高！！！

男②　いや、ちょっと、

男①　一緒に言うまでやめませんからね。（大声で）俺、最高！！！

男②　そんな、

男①　（大声で）俺、最高！！！

男②　俺、最高！

男①　俺、

男①②　最高！！！

男①②　俺、最高！！！！

いつの間にか、看護師が登場している。

看護師　静かにしてください。

男①②　すみません。

二人は大人しく座る。

☆劇中劇「おじさんとおじさん」

以下のシーンは看護師の語りによって展開される。

看護師　「おじさんとおじさん」。いつものように日は暮れて、いつものようにおじさんとおじさんが座っていました。二人はすることがありません。二人は病室を振り返り、前を向き、ほっぺたをパチンと叩きました。けれどすることはありません。

男①はポシェットから、サプリらしきモノを取り出す。

男①　どうですか？

男②　ん？

男①　ニンニクを発酵させてつくった黒酢です。

男②　へー。

男①　いや、ニンニクってね。発酵しないんですよ。殺菌作用が強いから。でもね、この会社「フォーエバーヤング」って言うんですけど、独自技術で世界初、ニンニク自体を発酵させることに成功したんです。

男②　へー。

男①　さらにその発酵ニンニクを、富士山の湧き水に漬け込んでつくったのが、このニンニク黒酢なんです。

男②　へー。

男①　女子プロゴルファーの、なんだっけな、韓国の人、スカート短い、

男②　その人も飲んでるんですか？

男①　ええ。どうぞ。（一粒わたす）

男②　あ、どうも。（受け取る）

男①　これを飲むとね、……スカートが短くなりますよ。

男①②は笑う。

看護師　なんだか悲しくなりました。

それぞれお茶でサプリを飲む。

看護師　二人は病室を振り返り、前を向き、足を組みなおして、ほっぺをパチンと叩きました。それでもすることはありません。しだいに憂鬱がおじさんとおじさんを包みます。人生の選択においておじさんは、いつも気軽な方、快適な方を選んできました。そして手に入れた孤独。人生の折り返し地点を過ぎた今、おじさんは叫び出したいような不安を抱えていましたが、それを伝えるコミュニケーション能力がありません。

男①　痛いらしいですね。
男②　え？
男①　出産。
男②　あぁ。
男①　なんか男で言うと、尿道にまっすぐお線香入れられて、ポキポキ折られるくらい痛いそうですよ。
男②　……それ、どういう状況ですか？
男①　だからまっすぐのお線香ありますよね。それを尿道に入れて、
男②　入らないでしょ。
男①　いや、興奮した状態なら、
男②　これから線香入れられるのに、興奮します？
男①　いや、する人もいるでしょ。
男②　するんですか？
男①　いや、僕はしませんよ。
男②　（笑う）
男①　いや、それくらい痛いって話ですよ。よく言うでしょ「東京ドーム8個分」とか。
男②　いや、ますますわかんない。
男①　いや、モノのたとえで言うじゃないですか、東京ドーム8個分とか、
男②　いや、言いますけど、今、そんな話してないじゃ、
男①　いや、だから、
男②　いやいやいや、
男①　聴きなさいよ、人の話を。
男②　だって、話、ズレてますよね。
男①　命がけなんですよ、カコちゃんは！

険悪な間。

看護師　なんだか悲しくなりました。

男①　僕もね、買いましたよ。鼻水吸う機械。

男②　無駄口たたくのやめませんか？カコ命がけなんで。

看護師　ますます悲しくなりました。

二人は、難しそうな顔して、腕を組み、足を組み、足を組みかえる。

振り返って病院を眺め、再び前を向き、両手で両頬をはたく。

看護師　おじさんはわかっています。自分の性格のダメなとこ全部。でも反省するほど自分が嫌いになる負のスパイラルをどうすることもできません。もう一度あの頃のように何気ない雑談で盛り上がりたい。無邪気な自分を取り戻したい。おじさんはいつもそう願っていました。

男②　すみませんでした。

男①　いやこっちこそ。

男②　いえ、申し訳ない。

男①　いやどうも、お恥ずかしい。

男②　……。うどんグラタンでしたっけ？

男①　あ、ウチの、

男②　すごく美味しそうですね。

男①　あ、美味しいですよ。

男②　どんな料理なんですか？

男①　ま、普通にホワイトソースつくるんですね。

男②　すごい。

男①　それにうどん入れて、チーズとクルトンのせて、オーブンで。

男②　それ絶対美味いヤツですね。

男①　元々はカコちゃんが賄いでつくってくれてね。今じゃウチの看板メニューですよ。カリカリのガーリックトーストと一緒に食べるのがオススメです。

男②　小麦好きにはたまりませんね。

男①　ん？

男②　いや、小麦が好きな人にはたまらない料理ですね。ビールも一緒に飲んだら、お腹のなか、えらいことになる。

男①　（やや不愉快に）ははは。
男②　ぜひ食べてみたいですね。
男①　どうぞどうぞ。

やや険悪な間。

看護師　やっぱり悲しくなりました。もうおじさんには雑談はできないのです。会議しかできないのです。でもおじさんは知っています。こんなおじさんでも一つだけ気軽にできる話がある。それは、

男②は目を閉じて瞼を押さえる。

男①　どうしました。
男②　いやもうこの時間になると目が、
男①　あぁ、
男②　シバシバしちゃって、
男①　僕もです。
男②　肩もね、（腕を中途半端にあげる）ここが限界。
男①　（同じようにあげて）僕も。

二人は笑いあう。

看護師　健康の話でした。それから二人は沢山話をしました。今飲んでいる薬の話、見分けがつかない若いアイドルの話、年々大きくなるテレビの音量、食べこぼし、細くなる髪の毛、夜間頻尿。チャーシュー麺頼んでチャーシューを残した話。なぜこんな話がこれほど楽しのでしょう。いま分娩室では赤ん坊が命がけで外に這い出そうとしている。若い女性が命がけでその苦しみに耐えている。１０メートルも離れていないこの場所で、俺たちは何をしているんだろう。これでいいんだろうか。でもすることないじゃん。そんな気持ちを抱えたまま、時間だけが過ぎてゆきました。

以下、看護師の語りと共に時間は経過する。

看護師　空は夕暮れから夜へ。
夜はしだいに更けてゆき、深夜。
午前1時を過ぎた頃、少しだけ雨がふりました。
午前3時を過ぎた頃、発情したネコたちが大合唱。

午前４時を過ぎた頃、瓶のこすれ合う音をさせて、牛乳の宅配車が通り過ぎ。
午前５時。東の方から空はイルカの背のような色を帯び、やがて一筋の陽が差し込みました。

看護師去る。
少ししてインターホンから声。

看護師の声　３０２号室、大石さん、
男①　（インターホンに向かって）はい！
看護師の声　今すぐ、分娩室にお越しください！
男①　はい！

インターホンでの会話終了。
男②は戸惑った様子。

男①　行きなよ。
男②　え、
男①　立ち会ってやれよ、
男②　でも、何て言えば、
男①　父親だろ。
男②　でも、私はカコの父親ですよ、
男①　そう。アンタはカコちゃんの父親なんだから胸張って行ってこい。
男②　……はい。

男②はマスクを整え、指先を消毒し、病院へ去る。
一人になった男①。
赤ん坊を抱く仕草。慈しみ、背中を優しくたたきゲップをさせる仕草。
男②が戻って来る。

男②　迷惑だから出ていけって、
男①　……。（向かいのグランドに何か見つけ）ん？
男②　どうかしました？
男①　（向かいのグランドを指さし）あ！大石！
男②　え？どこ？どこ？
男①　あの、グランドのとこ。バッターボックスで、
男②　はぁ？！

男①　（大石に向かって）おーい！カコちゃんがんばってんぞ！お前も頑張れよ！
男②　（大石に向かって）君！早く捕まりなさい！（男①に）あれ、何やってんですか？
男①　あれは……中田翔のマネですね。

男②は呆れ、落ち込む。

男①　（男②に）いや、あれはね。アイツの持ちネタなの、ウチの店でもあれやって、カコちゃん大ウケしてたんだから、
男②　でも今、まさに産まれるって時に、
男①　いや、まぁそれが二人が付き合うキッカケみたいな感じで、
男②　中田翔のマネが？
男①　いや、まぁ始まりなんかそんなもんでしょ。
男②　でも、今、やる？
男①　だから、あれがアイツなりのカコちゃんへのエールなんですよ。

男②はさらに落ち込む。

男①　お、今度は、左に移って、……。誰のマネだろ……（目をこらし、少しがっかりした感じで）あぁ
男②　誰ですか？
男①　あれ、小笠原ですね。ファイターズ時代の。あれも持ちネタなんで、
男②　（大石に向かって）バカ！小笠原はこうだよ！

男②も小笠原のマネをする。

男①　いや、張り合わなくても、

グランドの端に年寄りが二人いるのを発見する。

男①　（年寄りを見て）あれ、誰だろ、おじぃちゃん二人、大石に近づいてく。
男②　早朝のゲートボールかな？

しばし年寄り二人を見つめて。

男①②　ヤクザ？！！
男②　（大石に向かって）ヤクザが来た。早く逃げろ！

男①　（大石に向かって）大石！走れ！

短い間。

男①②　おじぃちゃん、足、おそ。

大石はグランドから病院に向かって、ガッツポーズをした。
男①男②もつられてガッツポーズ。

男①　あとのことは、
男①②　俺たちに任せろ！

大石は年寄り二人から逃げまわる。
男①②はそれを応援する。
パトカーのサイレンの音が近づく。
すっかり辺りは朝の光に包まれ、
やがて舞台に元気な赤ん坊の泣き声が鳴り響く。

おわり